一般社団法人 日本看護研究学会 近畿・北陸地方会

NEWSLETTER

第 28 号
2025 年 2 月 7 日発行

2024 年度の事業内容

第 37 回 看護研究セミナー
日時：2024 年 12 月 21 日（土）
13:30～16:10
開催方法：オンライン（ZOOM）

第 38 回 近畿・北陸地方会学術集会
日時：2025 年 3 月 8 日（土）
場所：甲南女子大学

一般社団法人日本看護研究学会
近畿・北陸地方会

世話人代表　武用 百子
大阪大学 医学系研究科

事務局　山内 彩香
大阪医科薬科大学

TEL:　06-6879-2546（武用）
E-mail:
momo-bu@sahs.med.osaka-u.ac.jp（武用）
saika.yamauchi@ompu.ac.jp（山内）

2024 年度 世話人代表挨拶

この度、近畿北陸地方会の世話人代表を若村智子先生より引き継ぎました、大阪大学の武用（ぶよう）でございます。まずは、平素より当地方会の活動にご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

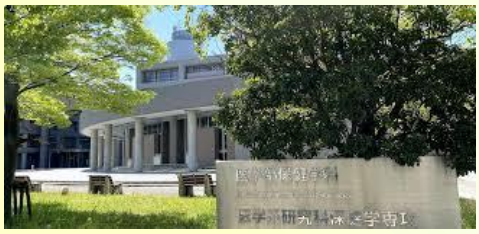
2024 年は、能登半島地震に始まり、その半年後には輪島市での水害が発生するなど、自然災害が相次ぐ一年となりました。このような状況下、地域社会における結束力や支え合いの重要性を改めて認識するとともに、看護研究を通じて地域社会に貢献する学会の使命を再確認した次第でございます。

こうした背景を踏まえ、第 38 回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会では、松下由美子大会長（甲南女子大学）のご指導のもと、「災害看護の過去・現在・未来」をテーマに掲げ、鋭意準備を進めております。本学術集会におきましては、災害看護のこれまでの実績を振り返り、現在の課題に焦点を当てるとともに、未来に向けた看護の在り方を検討する場となることを目指しております。どうぞ多くの方々のご参加をお待ちしております。

さて、近畿北陸地方会は、約 1200 名の会員を擁し、これまで学術集会や研究セミナーを通じて、会員の研究活動を支援してまいりました。特に研究セミナーでは、若手会員を推薦する仕組みを導入し、次世代の研究者育成と地方会の活性化に注力してまいりました。これらの活動は、地方会の特色を活かしつつ、看護研究を通じて地域社会や医療現場に還元するという学会の使命に基づくものでございます。

新たな体制のもと、看護研究をさらに発展させるとともに、地域社会への貢献を一層推進してまいります。会員の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

大阪大学大学院医学系研究科 武用百子



第 38 回 日本看護研究学会 近畿・北陸地方会学術集会

【日　時】2025 年 3 月 8 日（土）9 時～16 時 10 分
【場　所】甲南女子大学（兵庫県神戸市東灘区森北町 6 丁目 2-23）
【テーマ】「災害看護の過去・現在・未来 未来に向けて歩んでいく町や人びとの姿」
【大会長】松下 由美子（甲南女子大学）
【プログラム】
大会長講演：松下 由美子先生 「原点回帰から見る災害看護のこれから」
基調講演：増野 園恵先生 「コミュニティの回復力 理域の中長期支援の現状と課題」
教育講演：山川 みやえ先生 「Scoping Review の基礎的知識」

参加登録フォーム➡

第 38 回 日本看護研究学会 近畿北陸地方会 学術集会 大会長のあいさつ

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

昨年は、能登半島地震、羽田空港航空機衝突事故と衝撃的な辰年の年明けでした。被災に合われたご遺族の方々にお悔やみを申し上げます。また、未だ不自由な生活をされている方々にお見舞いを申し上げます。さらに、被災地での支援活動にご尽力されました全ての方々に敬意を表します。

辰年が明け、今年は巳年で金運アップの年だそうです。聞くところによると、ヘビは脱皮を繰り返すその習性から、生命力や再生のシンボルともされ、金運だけでなく全般的な運気を上げる縁起物の象徴でもあるそうです。一方「ヘビ」と「災害」何か関連があるのかしら?と調べてみますと、ヘビ型ロボットなるものの研究開発が行われていることがわかりました。確かに、ヘビはもともと細長い形状で柔軟な動きする多自由度稼働が可能な動物です。その形態をモデルに、遠隔操作によってこのヘビ型ロボットが倒壊した建物内部に侵入、移動しながら、要救助者の探索、発見をするというのです。

私たちの国は、過去、数々の災害に見舞われながら、その都度、知恵を使い、継承し、技術にしながら、ひとの生命力、再生力を逞しく発展させてきました。巳年となる今年が減災に向けた技術開発と、多くの専門職の交流によって、ますます私たちの生命力、再生力を発揮する年になればと思います。3 月に行われる地方会学術集会が、そのための看護活動の一助になればと考えています。皆さまの参加を心からお待ちしております。

甲南女子大学 松下由美子

第 37 回 看護研究セミナー 能登半島地震における災害支援と専門職への教育の実際

福井大学 佐藤大介

福井大学の佐藤と申します。福井大学では令和 6 年 1 月に発生した能登半島地震における発災直後から支援を継続しております。今回は支援チームについてご紹介をいたします。

能登半島地震における福井大学災害支援チームの活動

昨年発生した「能登半島地震」は、石川県能登地方に甚大な被害をもたらしました。震災により多くの方々が避難生活を余儀なくされ、仮設住宅では孤独や健康問題が深刻な課題となっています。福井大学では、こうした状況を受け、「能登半島地震災害支援チーム」を結成し、被災者の生活と健康を支援する活動を展開しました。

本チームは看護学科と医学科の教員、学生、大学院生を中心に構成され、能登町を拠点に令和 6 年 4 月から現在まで月1・2回のペースで活動しました。主な支援内容は、避難所から仮設住宅に入居した直後の被災者宅への個別訪問、健康教室やレクリエーションの開催などです。個別訪問では、被災者の健康状態や生活状況の把握を行い、必要に応じて健康相談を実施しました。訪問中には、「将来の生活への不安」や「熱中症への懸念」といった声を多く伺いました。特にエアコンが設置されていても使用していない仮設住宅では、酷暑への対策が重要課題として浮上しました。健康教室では、医師による健康講話や簡単な運動指導、深部静脈血栓症（DVT）の検診を行いました。延べ 75 名が参加し、5 名に DVT 所見が見られたため、弾性ストッキングの配布や医療機関での受診を勧めました。こうした教室は、健康維持だけでなく、被災者同士の交流の場としても機能しました。また、レクリエーション活動として運動を取り入れたゲームや白玉団子作りを実施し、参加者からは「気持ちが軽くなった」と好評でした。このような活動を通じ、住民同士のつながりを深めるきっかけを提供できたと考えています。さらに、この活動は、学生にとって災害看護を実践的に学ぶ貴重な場にもなりました。学生たちは被災地の実情に触れる中で、個々の健康状態や心理的支援の重要性を実感し、災害時に求められる多様な看護の役割を学びました。例えば、訪問活動では、高齢者への傾聴や健康管理がいかに心の支えとなるかを体感し、避難生活における看護の専門性の必要性を深く理解する機会となりました。

今回の活動は、被災地支援における大学の役割を再認識させる機会となりました。福井大学は、今後も地域社会と連携し、被災者に寄り添った支援を継続していきたいと考えています。